

〔解説〕 富士の麓で SDGs 学習プログラムを考案する

コミュニティ人間科学部の地域実習は30か所の実習先に分かれて行われるが、独立行政法人青少年教育振興機構の国立青少年教育施設での地域実習は5か所にのぼる。そのうち3か所は、子ども・若者活動支援プログラムに属し、残り2か所の内の1か所はコミュニティ活動支援プログラムに属しているが、国立中央青少年交流の家を実習地とする地域実習が属しているのは、女性活動支援プログラムである。

講義にもあったように、国立中央青少年交流の家は日本で最初の国立の青少年教育施設であり、そこでは青少年の教育や交流を目的としたさまざまな事業が実施されている。青少年教育施設を実習地とした地域実習の中には、こうした事業に参加するものもあるが、国立中央青少年交流の家での地域実習は少し異なったものとなっている。実際に行われている実習の内容に関して、ご担当である本学部教授の永井健夫先生にご教示いただいたので、ここで紹介したい。

国立中央青少年交流の家での地域実習は、SDGs学習プログラム（特に「ジェンダー平等」「質の高い教育」「陸の豊かさ」に関する）の考案に取り組むものである。この取り組みは次の3つの活動から構成されている。

（1）国立中央青少年交流の家の事業と歴史の理解を深める：国立中央青少年交流の家が設立されるきっかけとなった根上ツナ氏の活動を学び、またその活動を女性の社会活動の実例と

して検討し、青少年教育の質の向上に向けた今後の課題と可能性を検討した。

（2）御殿場の地域で活躍する女性から学ぶ：地元のコミュニティFM局の協力の下、FM局の施設において女性の社会参加に関する意見交換と、女性をターゲットとした番組構成案の作成を行った。

（3）国立中央青少年交流の家の豊富な自然から学ぶ：国立中央青少年交流の家のプログラムの一つであるビジュアルオリエンテーリングに参加し、施設の豊かな自然に触れつつ、プログラムの改善点について提言した。

地域実習を担当の永井健夫先生によれば、地域実習ではこのような活動が行われたとのことである。

国立中央青少年交流の家を実習地とする地域実習は、施設の事業やプログラムに参加することそのものではないが、施設の設立の歴史や自然への理解を通して行われるものであり、国立中央青少年交流の家という場所で行われることの固有の価値がある。根上ツナ氏の活動を実例として学びつつ、青少年教育施設として運営されている国立中央青少年交流の家について理解を深めることで、女性の社会的活動への参加およびジェンダー平等に関して、学校とは異なった場所における教育の意義や必要性について多角的に学ぶことができると思われる。

（諸岡 優鷹）